

## シンポジウム

### 家族看護研究のストラテジー

石垣和子（千葉大学）

野嶋佐由美（高知女子大学）

第11回日本家族看護学会学術集会を迎え、家族看護学の第二の発展課題に対峙する段階に至ったことを2つの視点から痛感致しました。学問の発展は常にその学問がどのような現象を取り上げ、その現象に対してどのような研究方法で探求していくかを常に掘り起こしていく軌跡であると言えよう。そのプロセスの中でいくつかのパラダイムシフトを経緯し、螺旋的に発展していくものであると考える。また、実践の科学である看護学ゆえに、何に向けてさらにどのような何をもたらすことができるかもまた、それぞれの社会的文化的文脈の中でダイナミクスに変動させていくべきであろう。そのように、家族看護学をひとつの学問の発展という視点から捉えると、「家族看護研究の推進—知の体系化と家族ヘルスケア向上」はまさしく家族看護学の第二の段階に突入したと解釈することができよう。

家族看護学を実践の中で蓄積してきたものを、知の体系化に向けて家族看護研究を促進していく段階に、そしてそのために、家族看護固有な研究方法を模索し、かつ戦略を立てていく課題に取り組む段階へと発展してきています。現在家族看護学領域では、家族看護の現象を探求する研究、家族看護の現象を記述する研究、家族看護の現象を測定する研究、家族看護の現象を説明する研究、家族看護の現象に潜んでいる相関関係を検証する研究、家族看護の現象に潜んでいる因果関係を検証する研究等々、さらに家族看護介入に関する研究など、様々な研究がなされている。そしてそれぞれの研究が新たな概念抽出や測定道具の開発、概念と概念との関係性についての新たな知見、介入に関する新たな知見が、家族看護学の発展に貢献している。

今回のシンポジウムでは、このような家族看護領域の研究をさらに発展、推進するためのストラテジーとして4つを取り上げて、参加者と共に討議する予定です。すなわち、4人のシンポジスト自身の研究体験や研究成果を参加者と共有すると共に、それぞれの家族看護研究の選択理由やその研究に内在している困難さ、限界なども、研究体験に基づいて話して頂ければと願っています。そして、家族看護の現象を記述するのに有益な概念の抽出化にむけてのストラテジー、家族看護における質的研究発展のためのストラテジー、家族看護理論を枠組みとした量的研究発展のためのストラテジー、さらに家族看護介入研究の発展のためのストラテジーについて検討を深めていくことを願っています。